

源三窟

地下水が炭酸カルシウムの地下堆積物にゆっくりと浸透し、源三窟が形成された。洞窟の部分がかつて塩原の古代カルデラ湖の底にあったことは、内部で発見された海洋生物の化石が証明している。洞窟の長さは、1659 年までは 2 キロメートルあったと考えられており、その年に起きた地震で大部分が崩壊したため長さが短くなり、約 50 メートルになったとされている。

言い伝えによると、武士であった源有綱（1155～1186 年）は、同族の一味から逃げている間、洞窟で暮らしていた。1180 年から 1185 年にかけて、平氏と源氏は日本の支配をめぐって争っていたが、1185 年に壇ノ浦の戦いで源氏が勝利したことで争いは終結した。その後、勝利した源氏の中で様々な派閥争いが起き、思いがけない権力争いへと発展した。有綱は、洞窟に隠れた後、洞窟の滝で米を洗ったために追跡者によって発見されたと言われている。そして追跡者を抑圧することができなかった有綱は、山へ逃げ込み自害を図ったとされる。